

オルドス・十二オトク考

森 川 哲 雄

目 次

- 一 オルドスに所屬する諸集團
- 二 オルドスのオトクの數
- 三 オルドス・十二オトク
- 四 オルドスの他の集團
 - (a) ノヤンダラの「四ホリヤ」
 - (b) 四オトク・ウイグルチンと三オトク・アマハイ
 - (c) その他の集團
- おわりに

はじめに

遊牧民社會を解明する鍵の一つが、その中においていろいろな形で活動している各種の集團の諸側面を明らかにすることであることは言うまでもない。それはまた從來からこの社會に關する研究で、諸集團の究明に多くの勞力が割かれてきた所以でもある。

この意味から中期モンゴル、すなわち所謂明代モンゴルの諸集團についての研究の現状を見るならば甚だ不十分と言わざるを得ない。もっともこれには理由が無いわけではない。すなわち從來から指摘されているように、この時代に關する史料が不足していることである。例えば『蒙古社會制度史』*Общественный строй Монголов, монгольской кочевой общины*, Л. 1934 を著したウラジミールツォフ B. Я. Брайнулов はその第二章「中期におけるモンゴルの社會組織」を記すにあたって、「我々の前には始めと終りがあるのである。この二つのモメントに關する材料を基とし、又はその後の、すなわち十七世紀の資料を利用して我々はその中間時代を推斷しなければならぬのである」と述べている。また我が國でも田山茂氏が『清時代に於ける蒙古の社會制度』（文京書院、昭二九）を著わす動機の一つとしてやはりこの點に言及され、ウラジミールツォフとはほぼ同様のことを述べられている。

これら二氏の言を待つまでもなく、中期モンゴル約三〇〇年を通じて、モンゴル人自身が殘した記録は極めて少ない。しかし先のウラジミールツォフの言葉については、彼が當時の中國史料の大半を利用し得なかつた、という事情を考慮した上で受け取る必要がある。また田山氏の著作については蒙文史料に關する認識が全く不足しており、またその利用も不十分と言わざるを得ない。

ところで中期モンゴルの社會・集團に關する史料、特に蒙文史料の狀況において、現在の我々が以前に比べて根本的に變化した中にいると言うことは到底出来ない。しかしながらこの狀況が徐々にではあるが改善されており、特に一九五〇年代から六〇年代にかけてモンゴルを始め各國で多くの蒙文史料が公けにされ、それらが簡單に我々の手にし得るようになってきた、ということも指摘しておかねばならない。ところがこれらの史料が公けにされてから或る程度の時間が経過したにもかかわらず、これらを本格的に利用してなされた研究はほんの僅かしかない、というのが實情であり、その意味ではむしろ研究の空白が目立つのである。

本稿では以上のような諸點をふまえて、中期モンゴルにおける重要な集團の一つであるオルドス・トゥメン Ordos

tümen の集團構成を明らかにすると共に、それに附隨する問題を若干検討し、中期モンゴル社會の研究に對する材料を提供し、またそれを深める足掛りの一つとしたい。

一 オルドスに所屬する諸集團

オルドスは周知の如く中期モンゴルの六トゥメン *Jirγuγan tümen* を構成するトゥメン（黃戸）の一つで、長城の北、黄河套を中心とする領域にその基盤を持ち、また十六世紀以降ジンノン *jinong* の稱號を持つ者の支配下にあったことも知られる。その中にチンギス・ハン廟 (*Naiman čayan ge*) を持ちモンゴルの文化の中心であると共に、政治的にも重要な役割を果している。

ところで當時のモンゴルの集團について傳えた最も古い記録は恐らく明の魏煥の皇明九邊考であろう。そこに記されている諸集團についてはすでに和田清氏の精緻な研究があり、また私自身も若干ふれたことがある。今オルドスに所屬する集團についてのみ再検討してみたい。皇明九邊考卷七榆林鎮の邊夷考に

阿兒禿斯部下爲營七、舊亦屬亦不喇。今則大酋吉囊領之。爲營者四、曰哱合斯、曰偶甚、曰叭哈思納、曰打郎。

とある。その他の漢文史料、例えば北虜考、邊政考、殊域周咨錄、明史紀事本末等にもオルドス（阿兒禿斯）に所屬する集團が記されているが、それらには目新しいものは無く、いずれも皇明九邊考を踏襲したにすぎない。

ところで和田氏はこの記事について、「ここには亦不刺の七營のことではないが、吉囊の四營だけある。その叭哈思納のことは解らないが、哱合斯、偶甚、打郎はそれぞれ（蒙古）源流の布哈斯 (*Bukhas*)、烏格新 (*Ügeshin*)、達拉特 (*Dala*) に當るであろう。」と述べられている。また最近になってアムビス *Hambis*, *Louis* 氏が “Note sur l'installation des Mongols dans la Boucle du Fleuve Jaune” という論文を發表され、やはり皇明九邊考等に記されたモンゴルの諸集團について検討されている。ただ氏はすでに先のような和田氏の研究があることに氣付かなかったのか、全く言及しておらず、この點

は遺憾であるが、若干和田氏の見解と異なるものがある。すなわち哮合廝を *Bogas*、偶甚を *Äüsin(Üsin)* としたのは同じであるが、叭哈思納を *Qabqanas* に、打郎を *Taläng(üin)* にあてている。叭哈思納に對する *Qabqanas* とは恐らく元朝秘史、二三九章に現われる集團であり、これはほぼ正しいと思われる。ただこの時代に見られるもので、オルドスに所屬するといふのであるから、まず蒙文年代記に記される *Baganas* に比定するのが妥當と思われる。これに對し「打郎」を *Talängüt* に比定しているが、「打郎」がオルドスに所屬する集團であり、また蒙文年代記にも *Dalad* がオルドスに所屬すると記されていること等からみて、やはり打郎は和田氏のように *Dalad* に比定すべきである。またこの點についてのアムビス氏の論點は甚しく説得力を缺く。^⑥

漢文史料にはこれ以上オルドスに所屬する具體的な集團は記されない。それでは皇明九邊考の著わされた嘉靖二十年前後において、オルドスは四つの集團（四營）から成っていたのであろうか。しかしこれは疑問である。そこに記された「營」なる語の意味するところは甚だ曖昧であることもさることながら、^⑦少なくとも哮合廝、偶甚、叭哈思納、打郎が當時のオルドスを分ける四大集團であつたとは到底考えられない。むしろこの點は明側の知識に限界があつた、と言わねばならない。これに對しモンゴル年代記は、編まれた時代はかなり下るけれども、オルドスの各集團をかなり詳しく傳えている。中でもオルドスの年代記である蒙古源流が最も詳しい。それによればダヤン・ハーン *Dayan qatān* の孫にあたるグン・ビリク・メルゲン・ジノン *Gün bilig mergen jingong* の九子に對する分封を記して次のようにある。^⑧

それよりメルゲン・ジノンは十九年經つてその四十五歳の庚戌の年（一五五〇）にお亡くなりになった。その子ノヤンダラ *Noyandara* は壬午の年（一五三二）生まれ、その三十歳の辛亥の年（一五五一）にジノンに即いて、それより九人の王子 *qad* らにその *ümci* を分け與えるには、ノヤンダラ・ジノンは四ホリヤ *Dörben qoriya* の上に、バイサングル *Bayisangγur* は癸未の年（一五二三）生まれ、右翼のケグート *Kegüd*、シバダチン *Sibaγučin*、ウラト *Urad*、タングート *Tangγud* の二つの上に、オイダル *Oyidarma* は癸未の年（一五二三）生まれ、右翼のダラト

Dalad' ハンリン Qanglin' メキト Mekid' バハナス Baqanas の二つの上に、ノムタルニ Nomtarni は甲申の年（一二二四）生まれ、右翼のベスート Besüd' ウグシン Ügüsin の上に、ブヤングリ Buyangruli は丙戌の年（一二二六）生まれ、右翼のバタギン Batagin' ハリグチン Qaliručin の上に、バジャラ・ウイジタン Bajara üjeng は戊子の年（一二二八）生まれ、左翼のハウチン Qaučin' ケリィェス Keriyes の上に、バドマ・サムボー Badma sambau-a は庚寅の年（一二三〇）生まれ、左翼のチャハト Čagad' シンガト Mingrad' ホリチン Qončin' ファダチン Quyayučin の四つの上に、アムダラ Amudara は辛卯の年（一二三二）生まれ、右翼の四オトク・ウイグルチン dörben otol Uyiručin の上に、オンラハン Onglagan は癸巳の年（一二三三）生まれ、右翼の三オトク・アマハイ Yurban otol Amaqai 等の上に座した。

以上をその記述に従って整理してみると次のようになる。^⑧

。四ホリヤ……………ノヤンダラ・ジノン

。右翼

ケグート、シバグチン……………

…バイサングル

ウラト、タングート……………

ダラト、ハンリン……………

…オイダルマ

メキト、バハナス……………

ベスート、ウグシン……………ノムタル

バタギン、ハリグチン……………ブヤングリ

四オトク・ウイグルチン……………アムダラ

三オトク・アマハイ……………オンラハン

。左翼^⑨

ハウチン、ケリイエス……………バジャラ・ウイジェン

チャハト、ミンガト……………

……………バドマ・サムボー

ホニチン、フヤグチン……………

すなわちオルドスにはグン・ビリクの九子に分封されたものだけでこれだけあったわけである。しかしながら、オルドスに所屬する集團は決してこれだけではなかった。蒙古源流は更にハルハタン *Qargatan*、シンホル *Singhor*、コイト *Koid*、ハキリス *Qakilis* 等を^⑩、またアルタン・トプチはこの他にブルバク *Burbay* などをオルドスの集團としてあげている^⑪。ただこれらのうち *Koid* は *Kegid* もしくは *Keiked* の誤寫かもしれない^⑫、また *Qakilis* は *Qanglin* のことかもしれない。しかしいづれにしても先のグン・ビリクの諸子に分封された集團と、これらの集團がオルドス・トゥメンの大部分を構成していたのである。なお附言するなら先に引用した蒙古源流の記事に若干不可解な表現があることに注意したい。すなわちバドマ・サムボーの場合四つの集團を分封され、これは「四つの上に」とあって問題は無いが、バイサングル、オイダルマ等はいずれも四集團を分封されたのに「二つ *qoyar* の上に」座したと記されていることである。これは勿論サガン・セチェン *Sayang seen* が誤ったのでは無く、實はオルドスに所屬するオトクについての重要な記述であったのであるが、この點は後章において明らかにする。

二 オルドスのオトクの數

清朝のもとに入りオルドスは最初六旗に編成されたが、その後一旗が増やされ、それより七旗 *Doloyan qosiyu* と呼ばれた。勿論これらは清朝に降服してから再編成されたものであり、それ以前は全く異った構成をしていた。

中期モンゴルのトゥメンは、當時の特色の一つとして、そこに所屬するオトクの數を附して呼ばれることが多い。この點オルドスはどのようになっていたであらうか。

アルタン・トプチはダヤン・ハーンの右翼討征後のこととして次のように記している。^⑨

ホルチン *Qorčin* のオルダフハイ・オン *Ordagugai ong* は「ダヤン・ハーンに」、「右翼三トゥメンを分けて取ろう。」と言った。「自分の怨んだ者を拘束した。怨ある者を屏ごとに使おう。怨ある者を一緒に置けば、我々の後裔たちを苦しめるだろう。七オトク・ハラチン *Doloyan otoy Qarāchin* を、我々の七オトク・ホルチン *Doloyan otoy Qorčin* に併合せよ。八オトク・オルドス *Naiman otoy Ordos* は中心である。八オトク・チャハル *Naiman otoy Čağar* に併合せよ。十二・トゥメト *Arban goyar Tümed* を十二・ハルハ *Arban goyar Qalqa* に併合せよ。」と言った。

これによればオルドスは八オトクと呼ばれていたという。これに對し蒙古源流は同じようなことをかなり異って傳えている。すなわちまず右翼三萬戸の征討前にダヤン・ハーンが語ったことばとして、

「オルドスはエジェンの八白室 *Naiman Čayan ger* を守護する大命あるウルスであるぞ。それと共にウリヤンハン *Uriyangqan* は同じエジェンの金の倉を守る、また大命あるウルスである。ホルチン、アバガイ *Abagai* と共に對抗するがよい。十二・トゥメトと十二オトク・ハルハを對抗させよ。大ユンシエブと八オトク・チャハルを共に戦わしめよ。」と言って共に戦い合う時、……（以下略）

とあり、先のアルタン・トプチとかなり異った内容を持つてゐる。また蒙古源流はダヤン・ハーンの死後、その孫のボディ・アラク *Bodi alay* がハーンに即いた時のこととして次のように記している。^⑩

ホルチンのバートル・モロジャイ *Bayatur molojai* は「右翼三（トゥメン）」は誰に良き人衆であるか。或いは攻撃して散り散りにさせよう。或いは逆に分配して左翼三（トゥメン）」と混ぜて分けよう。」と言った時、ボディ・アラク

・ハーンは同意して「右翼三〔トゥメン〕に出撃しよう。」と言い合っている時、チャガジャン・ナンナン・タイフ *Čaġan nang nang tayıq* なる母がかく言うには、「お前は右翼三トゥメンを分配し分けようと語り合っている。

以前ホルチンのオルダフハイ・オンはダラン・テリグン *Dalan terıgün* の大戦闘を戦い、『この右翼三〔トゥメン〕を共におらせるならば我々の後裔を苦しめることになる。二つの中心のウルス、チャハルとビジル *Bijir* (之) を併せ、大ユンシエブと我が二十トゥメン・ホルチン *Qorin tümen Qorčin* とも併せて、十二・トゥメトを十二オトク・ハルハを併せるならば、いつも平和である。』と申し上げた時、お前の良き祖父(ダヤン・ハーン)がかくおっしゃるには……(以下略)」

この中のナンナン太后の言葉に引用されている文は先のアルタン・トプチの内容に近いものではあるが、それでもやはり違っている。以上の中で最も問題であるのは蒙古源流がオルドスの年代記であるのに、そのオルドスがいくつかのオトクから成るかを全く傳えていないことである。また蒙古源流では右翼討征時にオルドスが、左翼部の如何なる集團と對抗し或いは併合されようとしたかをあから様には言わず、その部分を他の文に置き換えてさえている。この兩年代記のもとになった史料が或いは異なったとしても、蒙古源流の方は著者の手が加わった點が目立つ。これに對しアルタン・トプチの方はもとの資料をかなり忠實に傳えたもののようである。それではサガン・セチエンは何故このように記したのかと言えば、それは恐らく彼の所屬するオルドスが、ダヤン・ハーンの右翼討征時に、ダヤン・ハーンと敵對關係にあったことを露骨に言うことを避けたためであらう。これはサガン・セチエンが、その祖先のバルス・ボラトが汗位を篡奪したことを敢て記さなかった^④、という例と同じたぐいのものである。しかしいづれにしても蒙古源流がオルドスのオトクの數を全く記していないことは不可解であると言わねばならない。

それではオルドスはアルタン・トプチの記すように始め八オトクから成っていたのであろうか。しかしながらこの點には若干の問題がある。すなわちオルドスのオトクの數についてはこの他にもっと有力な史料がいくつかあるからである。

その一つはチャガン・トゥーフ Čaγan Teüke である。この史料はすでに知られているように十六世紀末に編まれたもので、オルドスのチンギス・ハン廟の祭祀、その他について記したものである。その中に次のような記事がある。

その後、百のモンゴルの地に Temüjin suutu boyda Činggis qaγan が生まれて、南贍部洲にある三百六十一の言葉を持つ者ら、七百二十一の氏族と十六の大いなる國を五色四異〔國〕Tabun önge dörben qari [ulus] となし、世界を定めた大いなる奇蹟を持つ者の故に、轉千金輪王たる Qubilai čakravara-un seçen qaγan は黄金の輝きの、あらゆる者の禮拜物である Naiman čaγan ger を建てた。大いなる法を定めるには、このあらゆる者の禮拜物の祭祀を法規の通りになし掌る宰臣らの長ホンジン、第二の吏目タイシ、ジャイサン、四十人の神官 Gerün noγad、四人のダルハン等、祭るべき四時の祭祀に必要とする物等を、十二、オトク・オルドス・トゥ、メンに堅固に祭らせるように定めた。

すなわちオルドスは、ここでは十二オトクから成るとされている。この史料ではこの他、單に十二オトクというだけでオルドスを指している例も見られる。^⑧ また別な史料に、やはりチンギス・ハン廟に関する史料 Yeke quim-un yoson があり、それにも明確にオルドスは十二オトクとされている。但しこれについては次章において詳述するのでここではこれ以上記さない。

以上のように我々にはオルドスを構成するオトクの數について、アルタン・トプチの「八」とチャガン・トゥーフ等の「十二」の二種類の記録がある。ただこの二つの數字を比較してどちらが正しいかを直ちに斷定しようとするのは必ずしも妥當ではない。つまり、アルタン・トプチがオルドスのより古い形を傳えていて、オルドスが「八」から「十二」へと増えたとも考えられなくはない。しかしこの場合アルタン・トプチの先の記事を注意して讀めば、それが韻をふんだものであることがすぐに分るであろう。その部分を轉寫してみると次のようである。

Doloyan oloy Qaračin-i.....

Doloyan otoy Qorčin-dur neylegü!

Naiman otoy Ordos rool bile,

Naiman otoy Çaqar-tur neylegü!

Arban goyar Tümed-i

Arban goyar Qalq-a-du neylegü!

すなわち第一語の數を同じくして、二句づつ頭韻をふんでいるのである。ということはこのアルタン・トプチに傳えられた記録はもともかなり作爲的な要素が強かったとは言えないであらうか。第一にこれだけ同數のオトクを持った集團が並べて記されているのはどうみても現實的では無い。オルドスと對になっている八オトク・チャハルというのは實際に存在したもので、これは疑いようが無いが、或いはこれにあわせて韻をふむためにオルドスを「八オトク」と記したのであらうか。但しこのことは斷定するところまでいかない。これに對してチャガン・トゥーフや Yeke qurın-un yoson 等の記録はより確實である。すでにふれたようにこれらはオルドスにあるチンギス・ハン廟の祭祀に關する史料であり、従つてその祭祀の中心となつたオルドスの構成について、非現實的なことを記すはずは無く、そこに傳えられた記録にはかなり信頼を置いてよいであらう。従つてアルタン・トプチの「八オトク」に若干の留保をしながらも、チャガン・トゥーフの編まれた十六世紀の終り頃に、オルドスが「十二オトク」と稱されていたことは間違いないようである。それでは「十二オトク」とは具體的に何を指すか。

三 オルドス・十二オトク

モンゴルのリンチェン氏 Rintchen, B. がモンゴリア各地の folklore を集めて、それらを *Les Matériaux pour l'Etude du Chamanisme Mongol & Folklore Mongol* というシリーズで公けにしていることはすでに知られてい

るところであり、それらを基にして書かれた論文も少なくない。ところでその中の *Chamanisme Mongol* の第一集 (*Asiatische Forschungen*, Band 3, Wiesbaden, 1959) に先に示れた *Yeke qurim-un yoson* (大祭の次第) なる資料が載せられている。^② その内容は以下によっても分る通り決してシャーマニズムに關するものではなくて、チンギス・ハン廟における祭祀の次第を記したものである。それには次の如くある。

ハーンとジノンはまさしく前の通りにアラジャ *araja*、アラキ *araki* の二つを持つて叩頭してすわれ。 *tuɣul* が来て「香をささげよ」と招け。何人かのタイジ等が従い「共にささげよ」と聲をあげよ。香をささげて出る時、*tuɣul* は「食物をささげよ」と聲をあげよ。食物をささげてから行く時、*tuɣul* は *manglai* の背後に走って来て「供物をささげよ」と聲をあげよ。供物をすべてささげること、六つの大なる歌 *būrlüg* (6) を飲むこと、觥に杯を奉ること、お返しに飲むことはまさしく前の通りである。この後にジノンはオールド *ordo* の左側に座して大なる貢物 *Yeke alban* を数えよ。^③ オルドス・トゥメン *Ordos tümen* の貢物は百 *longqu* (瓶) ある。左〔翼〕六オトクのチャント *Čagad*、ミンガン *Mingγan* は十五 *longqu*、ホリチン *Qončin* は十二 *longqu*、ハグチャット *Qayučid* は十二 *longqu*、キルギス *Kirgis* は十二 *longqu*、また一 *longqu* はニクリエン *Qoyar kürien* に結 *kerükü* (?) のである。右〔翼〕六オトクのダラト *Dalad*、ハンリン *Qanglin* は八 *longqu*、メルケト *Merked*、ハハナス *Baganas* は九 *longqu*、ハリグチン *Qalırucın*、ハタギン *Qatagin* は八 *longqu*、ハスート *Besüd*、ウグシン *Ügüsin* は八 *longqu*、ケグート *Kegüd*、シバグチン *Sibaγucın*、内のタングート *Tangγud* は八 *longqu*、内のタングートは二 *longqu* のアラキを自分の前に撒き飲むのである。タングート、ウラト *Urad* は九 *longqu* ある。貢物のアラキより、馬を殺す時に一杯のアラキを、杯を洗う〔時〕一杯のアラキを屈けよ。天蓋を開ける時に奉る四杯のアラキを先に與える次第があるのである。

また最後の方では

神官ら (Gerlin noyad) が職務より越えて (?) 暮せばジノン は罰を課して馬を取るのである。四つの大祭の犠牲の馬、羊、諸願の〔時の〕羊は十二オトク (Arban goyar otok) が代つて與えるのである。

と記している。具體的な情景がよく分らず、リンチェン氏の轉寫の問題もあり不明の點が多いが、問題にしている部分はすべて以上の中に含まれている。清朝の支配下に入ってオルドスはその組織を一變させてしまったわけであるが、この Yeke qurim-un yoson はそのあとがきによれば一六三四年に記されたものらしく、従つて當然オルドスのそれ以前の姿をかなり正確に傳えていると考えられる。まずここに記されている記録について検討しよう。オルドスが十二オトクから成ると稱されていることは先のチャガン・トゥーフと一致する。またオルドスが左・右兩翼に分かれていたということは、蒙古源流の傳えるところと全く一致する。この記録で最も重要な點は左・右兩翼がそれぞれ六オトクから成ることであり、これは他の史料に見られない貴重なものである。それではこの記述によつて左・右翼の集團をふり分けてみると次のようになる。

。右翼六オトク

ダラト、ハンリン、メルケト、バハナス、ベースト、ウグシン、ケグート、シバグチン、ハリグチン、ハタギン、タングート、ウラト、

。左翼六オトク

チャハト、ミンガン、ホニチン、キルギス、ハグチット、

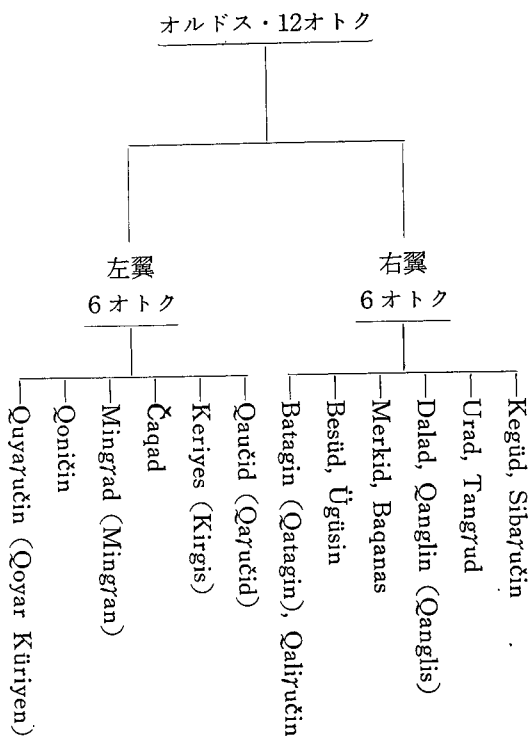
ところが以上によつても分る通り、右翼部には六オトクどころか十二の集團が數えられ、逆に左翼部には五つの集團しかみられない。ともかくこの點を若干検討してみたい。まず注意されるのは Yeke qurim-un yoson における各集團の記述方法である。すなわち右翼部には確かに十二の集團が見られるけれども、それらはいずれも二つの集團を對として記されていることである。ダラトとハンリン、メルケトとバハナス等々の如きである。何故このような形で並べて記されて

いるかが問題である。ここで思い出されるのが先の蒙古源流の、グン・ビリク・ジノンの九子に對する分封を記した記事である。先にもふれたようにそこには若干不可解な記述がみられた。それはグン・ビリクの第二子バイサングルに對して右翼のケグート、シバグチン、ウラト、タングートの四集團を分封し、また同様にその第三子オイダルマに對し右翼のダラト、ハンリン、メルケト、バハナスの四集團を分封したのにいずれも「二」(qoyar)と記されていることであつた。

しかしながら先の *Yeke qurim-un yoson* の疑問も、この蒙古源流の疑問も、兩者をつきあわせることによっていとも簡単に解決するのである。すなわち蒙古源流に記された「二」(qoyar)とは明らかに二、オトクのことである。従つてこのことからすればバイサングルの所領となつたケグートとシバグチンはこの二集團が一オトクであり、またウラトとタングートも同様にこの二集團で一オトクと考えられていたわけである。更に第七子バドマ・サムボーが「四」(dörben)と記されているのはその分封された左翼のチャハト、ミンガト、ホニチン、フヤグチンがそれぞれ一オトクであることを意味したわけである。そしてこの蒙古源流の記事の中で、複数の集團の名が記されている、その後何の數字も附されていないのは、それらを併せて一オトクを意味するものと、と解釋することが出来る。例えば第四子ノムタルニの分封されたベーストとウグシンはそれで一オトクであつた、という如きである。

以上によつてオルドスの十二オトクはほぼ明らかになつたと思われるが、若干の問題が残されている。それは先にもふれたように *Yeke qurim-un yoson* には左翼部に五オトクしか記されていないこと、また蒙古源流に記されている集團と若干名稱の異なるものが見られることである。前者の場合、蒙古源流に記される左翼部のフヤグチンが、*Yeke qurim-un yoson* には脱落しているのであるが、その理由は不明である。もっともこの場合 *Yeke qurim-un yoson* にはその代りとしてニクリェン *Qoyar küriyen* なる集團が見えることが注意されよう。この集團は蒙古源流その他の史料には全く現われないもので、従つて如何なる性格のものか詳らかでない。ただ *Yeke qurim-un yoson* に見る限り、一オトクと同列に見られていたようでもある。また兩史料の間に異つた名稱が見られることについて煩雜な論證は避けるが、例え

ば Yeke qurim-un yoson の Kirgis はやはり源流のやうな Keriyes と見るべきであらうし、また源流ウルガ本の Merkid は Merkid とすべきであらう。このやうな問題はあるが以上の考察からしてオルドス・十二オトクを整理して表にすると次のようなものであった。(括弧内は Yeke qurim-un yoson の記述による)



四 オルドスの他の集團

以上の章でオルドスが十二オトクと稱されていたこと、またそれが具體的にどのような構成をしていたかを明らかにした。しかし残された問題は多く、また重要な意味を持っている。最も注意されるのは、現にオルドス・トゥメンに所屬

しているが「十二オトク」に数えられない集團が多くあることである。例えば長子ノヤンダラの分封された Dörben güräs や第八子、第九子の分封されたウイグルチン、アマハイ等が問題になろう。またボルジギン氏族の直接の所領にはならなかったが、オールドスに所屬するとされている集團はどうであったか。そしてこれらの集團がどうして「十二オトク」に数えられなかったのか等も問題である。實のところ、この問題はオールドス・トゥメンの歴史と密接に結びついていると思われるが、この點を併せ以下若干検討したい。

(a) ノヤンダラの「四ホリヤ」

この「ホリヤ」なる語はグン・ビリクの九子の分封の時に突然現われ、それ自體では解決の決め手は無い。ところでウラジミールツォフはこの「四ホリヤ」を含め、この時代のホリヤについて次のように説明している。^⑧

我々の資料中には、元朝時代以後極めて大群を以てする遊牧法を蒙古人が再び取るに至ったことを相當漠然と記したものである。不斷の戦争と襲撃に影響されて、蒙古人は大屯營をなして遊牧するようになった。この野營は數千人を一團とするものでホリヤ *хорйа* 「野營 *ягель*」 「屯營 *стан*」と呼ばれることになった。

ウラジミールツォフが「ホリヤ」をこのように「極めて大群を以てする遊牧法」で、「大屯營をなして遊牧し」「數千人を一團」とするものという根據は何か。中期社會に存在したという點については、先の蒙古源流に記された記事に據っていることはまず間違いない。またその他ボコチロフ [Покотилов, П.] の譯した明史韃靼傳の記事 (*История Восточных Монголов в период Династии Мин 1368—1634, СПб., 1893* 所收) をもその根據にしている。蒙古源流の方にはさておいて、韃靼傳の記事について検討してみたい。ウラジミールツォフはその註で二ヶ所引用しているが、その一つは“этой ставке кочевников” (стр. 109) であり、他の一つは“ряд несколько десятков уклетленных тагелей” (стр. 145) である。これを韃靼傳の原文につきあわせてみると、前者は「成化九年……王越……至分薄其營」であり、また後

者は「明年（正徳九年）秋、敵連營數十」にあたる。ここで問題になるのは「營」なる語であるが、これをポコチーロフは“ставка кочевников”とか“укрепленных лагерей”と譯している。ところで『五體清文鑑』ではホリヤを漢語の「營」にあてていること、またコワレフスキー Kowalewski, J. E. の『蒙露佛辭典』ではホリヤの露譯として лагерь 等の語をあてている。單純に言うなら「營」↓“larep”↓“goriya”が成立し、従つて明史の「營」が qoriya と結びつくに見える。しかし「營」なる語は先にふれたように漢文史料ではかなり曖昧な形で用いられていることを忘れてはならない。しかもこの場合「營」が「軍營」を指していることは明らかである。ホリヤがそのように用いられていることは若干の蒙文史料からも伺える。例えば Činggis qayan-u yeke ödig の中に次のような文が見える。^⑧

邪惡な者たる敵に向い

ホリヤをなし (qoriyala-) 駐屯したる

十三萬の汝のヌトクよ。

邊境の大いなるクリエン kuryen-

ホタをなし (gotala-) 駐屯したる

汝の二と六十のホリヤよ。

近づいて駐屯したる

選りすぐった兵營 (legürge) なる汝のホリヤよ。

汝の黄金の宮殿の飾りとなつて、

北・南に四重に駐屯せしめたる

汝の兵營なるホリヤよ。

ここに記されているホリヤが、軍營を意味するものであることは全く疑い無い。つまり以上見て來た例はいずれにして

も大體戰鬪時における「軍營」を意味するものであり、「大群を以ってする遊牧法」と考えることは全く不可能と言わねばならない。ただこのような意味からすれば、かの *Dörben qoriya* は單に「四つの軍營」ということであるが、これでは意味をなさない。つまり他の諸子はオルドスに所屬する具體的な集團を與えられており、従つて *Dörben qoriya* とはもっと具體的なものを指している筈だからである。

ところで「ホリヤ」という言葉にはいろいろな意味があるようで、D.O. には「家畜を守るための圍い」「圍われた場所」「王公の住居」「軍營」などの意味が記されている。(p. 360a) また古く虜龍塞略、卷十九、譯部上、居處門にも「院落曰豁里顔」とある。豁里顔 *huo-li-yan* が *qoriya* であることは疑いが無いが、「院落」とは「垣根で圍われた屋敷、中庭」のことであり、D.O. の第二の意味に近い。しかし「ホリヤ」はまた一方でもっと具體的なものを指して使われている。それはチンギス・ハン廟を指すエジエン・ホロー、ホローである。D.O. によれば *edzi xoro* というのは「チンギスのバビリオンを包含する圍い」のことであるという。そして更にチンギス・ハンとその家族の成員の遺品をあがめる *xoro* として六つあげている。(p. 360a)

「ホリヤ」の意味するところが大體以上のようなものとすれば、先のノヤンダラの *Dörben qoriya* はどれにあたるか。結局エジエン・ホローがオルドスにあったこと、そしてその祭祀においてジノンが重要な役割を果していること等からみて、まずエジエン・ホローのホローにあてるのが最も妥當と思われる。⑥ それでは *Dörben qoriya* の *Dörben* (四) とは何を指すかが問題である。まず考えられるのが元の太祖、つまりチンギス・ハーンの四斡耳朵の「四」である。これらのオールド(斡耳朵)の主人であるボルテ・ハトン *Börte qatun*、フラン・ハトン *Qulan qatun*、イス・ハトン *Isu qatun*、イスケン・ハトン *Isüken qatun* の名は蒙古源流に記される讚歌の中にもしばしばみられ、⑦ 従つて太祖の四オールドの「四」が最も有力なものと考えられる。ただ蒙古源流やアルタン・トプチ等に見られる記述においてはボルテ・ハトンやフラン・ハトンが比較的重要な役割を果しているのに對し、後のイス、イスチン兩ハトンは具體的な事件の中に現わ

れることは無く、簡単にふれられているだけである。この傾向に似た興味ある報告がある。ソビエトのモンゴル學者デ・リコフ氏 Дельков, С. Д. は一九五六年四月にチンギス・ハン廟を訪れたそうで、それについて“Джиген-Хоро”という報告書を記し、併せてそこで見たという三つの史料を掲載している。④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇

る任務を與えられたものであらう。勿論これに伴う遊牧地も與えられたではあるが、ともかくこの「四ホリヤ」がオルドスの左・右兩翼どちらにも屬さず、また十二オトクにも數えられなかったのは當然であらう。なお以上のことは遊牧法の一種としての「ホリヤ」の存在を否定したものではなく、先の蒙古源流や明史等の記事が當時の遊牧形態を表わしたもので無いことを指摘したものである。従つてこの時代にウラジミルツォフの言うような、「大集團を以つてする遊牧法」としてのホリヤがあるとするならそれは別の資料に據らねばならない。但し筆者はそれに對しては消極的な見解であることを附け加えておく。

(b) 四オトク・ウイグルチンと三オトク・アマハイ

蒙古源流はこれらの集團をいずれも右翼部に所屬するとしているが、すでに見たように、いわゆる右翼六オトクには數えられていない。この問題は大變難しいが必ずしも理由の無いことではないようである。すなわちこれら兩集團を分封されたグン・ビリクの第八子、第九子の母親の出自が若干の鍵となると思われるからである。グン・ビリクには四人の妃があつたと言われるが、そのうちの二人はトゥメトの出身であり、また一人はハルハのジャライル族の出身である。そして四人目はイブラヒム（イバライ）・タイシの娘ナムルチャ・ハトン *Namurča qatun* であるという。ここで問題となつた先の二子はいずれもこのナムルチャより生まれているのである。そしてつまるどころナムルチャの父すなわちイブラヒムとオルドスとの關係が最も問題になる。

イブラヒムの出自については後にふれるとして、彼が十六世紀初頭東モンゴルに進出し、應紹不（*Yunshiepu*）と阿兒禿斯（*Ordos*）兩部を支配していたことは皇明九邊考等の記事によつて明らかであるが、その後いわゆるダヤン・ハーンの右翼討征により河套地方より追われた。蒙古源流は更に、イバライ（イブラヒム）が一人で逃れ白帽のハミ *Çayan malaya-yin Qamil qota* まで行き、そこで殺されたと記しているが、これはすでに指摘されているように誤りで、實のところは

西海地方まで逃れ、そこに居を定めて、後にはかなりの力を盛り返したようである。

イブラヒムはその後西海地方より中國北西部に侵入を繰り返していたが、逆にモンゴルのハーン（小王子）とは先の敵對關係を解消しようとしたらしい。すなわち明實錄、嘉靖九年十一月丙辰（三〇日）の條には

巡按陝西監察御史范安奏、北虜小王子與西海亦不刺解、讎結親、往來我境、殊非中國之利云云。

とあり、小王子とイブラヒム（亦不刺）が和を結んだことが記されている。しかしながら明實錄はこの兩者の「解讎結親」についてはそれ以上具體的なことは何も記していない。けれどもこの事件はその後意外な進展をみせているのである。張雨の邊政考、卷五、北虜の項の嘉靖九年の條には

三月「阿爾禿斯」由莊浪北鎮羌堡入西海、與亦不刺結姻。復由鎮羌回至賀蘭山外住牧。亦不刺女、先已許小王子、至是、阿爾禿斯娶爲子婦。惧小王子讎殺、欲假道寧夏入套。令數十人詐爲僧並丐者、潛入寧夏看路、爲守者所獲。五月二十六日、阿爾禿斯過寧夏。時領衆二萬並所娶亦不刺女・陪嫁駝馬牛羊萬餘。

とある。これによつて明らかのように、まずイブラヒム（亦不刺）と當時の小王子たるボディ・アラク Bodi alay との間に婚約が整ったが、これに阿爾禿斯が横やりを入れて、自分の子の妻にしたと言う。ただこの場合阿爾禿斯とは具體的に誰を指すか述べておく必要がある。皇明九邊考、卷一、蕃夷總考では、

正德初、北虜小王子弟阿爾禿斯與丞相亦不刺殺小王子。小王子怒、二酋懼。四年奔出河套、擁部落萬餘、至涼州。

〔中略〕嘉靖八年八月、阿爾禿斯北渡河出套、由寧夏北境入莊浪住牧。〔中略〕〔九年〕五月二十六日、阿爾禿斯子領衆

二萬並所娶亦不刺女、復過寧夏入套。

とあり、ここに現われた阿爾禿斯がすべて同一人物のようにみえる。普通この頃の阿爾禿斯はオルドスのマンドライ・アハラフ Mandulai agalagu に比定される。それ自體誤りでは無いが、明側から「阿爾禿斯」と呼ばれたものはそれだけではない。例えばアルタン・ハーンにその妃、後の三娘子を奪われた襖兒都司や、グン・ビリック（皇明九邊考、卷一）等があ

げられる。ところで九邊考の阿爾禿廝であるが、イブラヒムとマンドライはダヤン・ハーンの右翼部討征によりオルドスより追われ、その行く先を明實錄正徳七年十一月乙未（二五日）の條は、

巡按陝西御史成文奏、自六年正月以來、虜酋阿爾禿廝・亦不刺爲小王子所收、部衆奔甘・涼・永昌・肅州等處駐牧、傷殘疾疫死者甚衆。

と甘肅地方に逃れたことを記している。阿爾禿廝の名はしばらくして實錄には全く現われなくなるが、その理由はともかく、甘肅に逃れた阿爾禿廝が嘉靖の初めに再び「北渡河出套」ということは考えられない。従ってまず正徳の頃の阿爾禿廝と、嘉靖初期のそれとは別人物とみねばならない。ところで明實錄嘉靖八年三月戊申（二三日）の條には

大學士楊一清言、屬者套賊假道寧夏、將越賀蘭山掠莊浪・西寧云云。

の報告がみえる。この「套賊」というのは先の皇明九邊考、邊政考では「阿爾禿廝」となっている。この頃套賊、すなわちオルドスの虜酋でこのような行動をなし得たのはダヤン・ハーンの子のバルス・ボラト以外には考えられない。バルス・ボラトの死は一五三一年（嘉靖十年）で、この時は生きていたし、その子グン・ビリックとイブラヒムの娘が結婚したと、またその間に生まれた二子のうち年長のアムダラは一五三一年の生まれであること等、漢蒙兩史料に何ら矛盾はない。従って、先の邊政考の阿爾禿廝がバルス・ボラトにあたることは間違いない。

さてグン・ビリックとイブラヒムとの平穩な關係は長くは續かなかったようで、明史、卷三二七、韃靼傳に

〔嘉靖〕十二年春、吉囊擁衆屯套內、將犯延綏、邊臣有備、乃突以五萬騎渡河、西襲亦不刺・卜兒孩兩部、大破之。

とあり、嘉靖十二年頃イブラヒム等がオルドスの吉囊、すなわちグン・ビリックに破られたという。但しイブラヒムの占據した西海地方がモンゴルの支配下となったのは、これより後のトゥメトのアルタン・ハーンの西征によるものである。

しかしともかくもこれによってグン・ビリック・ジノンはイブラヒムの部落の大半を收め、病没する嘉靖二十一・二年頃までその全盛期を迎えたりし。その力が西方に伸びていたことは明實錄、嘉靖十五年八月丙午（二三日）の條の「先是

四月中、虜酋吉囊率衆十萬屯牧賀蘭山後、已而分遣其衆入寇涼州」や、同嘉靖二十年三月壬寅（二六日）の條の「先是去冬虜酋吉囊部落數萬騎、踏水渡河住牧賀蘭山後、至今春犯鎮朔堡」、同年五月己亥（一四日）の條の「先是二月內、套虜犯甘肅・莊浪等處」等によつても明らかである。

かくして問題になるのはイブラヒムの出自である。蒙古源流ではユンシエブのイブラヒム（イバライ）となっているが、これはすでに見たように、イビラヒムがユンシエブを領したことから來ているのであつてその出自を言ったものではない。これに對して注目されるのはアルタン・トブチの記事で、それにはウイグ、*Uyghur* のイバライ（イブラヒム）とある。なおイブラヒムの出自についてはすでに和田氏が若干の見解を示され、それによれば、もともとは哈密北方の野也克力部（メクリン）の出身であるという。更に最近になって間野英二氏は、タリヒ・ラシーディー等の史料により、イブラヒムは單にメクリン部の出身では無く、エセン・タイシの孫であつて、オイラト内部の紛争の結果ハミ附近に至り、メクリン部の酋長に迎えられ、以後徐々に力をたくわえて、ダヤン汗の丞相にまで榮達したとされる。イブラヒムがエセンの孫であるという點は甚だ興味あるがただこのことはシラ・トゥージやガワン・シェラブの四オイラト史 *Dörben Oyiridiyn Tüike* 等の蒙文史料や欽定西域同文志に見られるオイラトの部族の系譜には全く記されていないことからして、若干の問題が無いでもない。しかしいづれにもせよイブラヒムが本據地を離れウイグル人を含むその部民を引き連れ河套地方に居を定めたことは事實であらうし、従つて一部の年代記に彼をウイグ、ト出身としているのはむしろ當然であらう。以上のことからアムダラの分封された「四オトク・ウイグルチン」は、その集團の名稱、その母の出自、グン・ビリクの動き、更にはイブラヒムの出自とその後の動靜からみて、もともとイブラヒムの直接の所領であつたものが、先にみたグン・ビリクとのいろいろな關係により後者の領するところとなつたものであらう。また第九子オンラハンの分封された「三オトク・アマハイ」については今のところ考察する材料は無いが、ウイグルチンと同様のものであつたと思われる。そしてグン・ビリク・ジノンの諸子分封の際、以上みた事情により、イブラヒムの娘ナムルチャより生まれた二子に

與えられたものであらう。このようにこれら二つの集團がオルドス・トゥメンに加わるについては特殊な事情があつたために、オルドスの集團の統屬關係では一應右翼部に配されたものの、他の集團とは區別され、従つて「十二オトク」には數えられなかつたのであらう。

(c) その他の集團

ここで言うのはオルドス・トゥメンに所屬しながら、やはり十二オトクに數えられず、またボルジギン氏の直接の所領にならなかつた集團を指すのであるが、それらの名稱についてはすでに第二章で若干指摘した。それらの中ではハルハタンなる集團が顯著である。従つてまずこの集團について若干検討しよう。ハルハタンの名は、まずダヤン・ハーンに對し右翼部を統轄するジノンを要請しに來たサイトの一人バイジュグル・ダルハン Bayjur dargan がその集團に所屬する者として見えるのが初見で、またこの人物はダヤン・ハーンの右翼討征時に、ダヤン・ハーンに味方しており、それらの功績によつてダイ・ダルハン dai dargan の稱號を得たといふ。このハルハタン部はオルドスがグン・ビリクの支配下に入り、更にその諸子に繼承されてからどのようになったかについては明らかでは無い。ただ蒙古源流等の記事による限り、直ちにグン・ビリクの後裔の直接の所領になるようなことは無く、先のバイジュグル・ダルハンの後裔に承け繼がれたものと思われる。そしてハルハタン部の名はその後オルドスのジノンを始め有力な部酋の指揮で行なわれた戦闘、掠奪行動の中にしばしば見える。例えば一五七二年にオルドスのブヤンダラ・ホラチ・バートル Buyandara qolaci bayatur とサインダラ・チン・バートル Sayindara čing bayatur が指揮してトクモク Tojmoč のアクサル・ハーン Aysar qayan に對して進撃した時に、

「ボルサイ」セチェン・ダイチン Borsai sečen dayičing はブハス Bugas のドルベイ・バートル Dörbei bayatur、ハルハタンのトクタガ・タイシ Toɣtaɣa tayisi を始め七人のネケル nökör たちを連れ、徒歩で互いに戦い合い出

た。

とあり、ハルハタン出自の者が記され、また同じく一五九二年と九四年にボショクト・ジノン Bošortu jinong の中國侵入に従った者の中にハルハタン部のアシト・ハラ・グチ Asitu gara guchi の名が見えてゐる^⑧。これらの行動を共にした者にハリグチンやウグシン等のオルドス右翼部に所屬する集團の出自の者が見えることからして、ハルハタン部は十六・七世紀までオルドスの右翼部に所屬する集團で、恐らくはかなりの勢力を保有し、ジノンもしくは右翼部の有力な部酋の指揮のもとに戰鬪行動に参加していたようである。

なおハルハタンについては比較的新しいが興味ある報告がある。それはポターニン Потанин, Г. Н. の Тангутско-Тибетская окраина Куман, СПб. 1893 で、その第四章「オルドスのモンゴル人たち」で「オルドスのモンゴル人たちは自分たちの氏族の名——すなわち彼らは『オモク』と呼んでいるが——についての記憶を残している」と述べ、その中でウーシン Ушинь 旗に所屬するオモクの中に Хархатань (Тархатань) の名をあげている (TOM I. стр. 103)。同様のことは D. O. にも記されている (p. 295-a)。これらの報告によれば十九世紀にはハルハタンはウーシン旗に所屬する集團であつたらしい。ともかくもボルジギン氏の直接の所領とならなかつた他の集團もこのハルハタンと同様であつたと思われる。従つてすでにボルジギン氏の世界になつてゐた東モンゴルにおいて、これらサイト階層の集團はやはりそれと對等の勢力は持ち得ず、それ故オルドスにおいてこれらの中小の集團が「十二オトク」に數えられなかつたのも當然であらう^⑨。

おわりに

以上中期モンゴルの重要な集團の一つであつたオルドス・トゥメンの構成を明らかにすると共に、それに附隨する問題をオルドスの歴史と併せて述べた。これをまとめると次の通りである。オルドスに所屬する諸集團についてはいくつか

の漢文史料や、蒙古源流、アルタン・トブチ等の蒙文史料により從來からほぼ知られていたが、それらがどのような形で編成されていたのか不明であった。従つてまずチャガン・トゥーフ等によつて十六世紀末頃オルドスが「十二オトク」と稱されていたことを明らかにした。次に *Yeke qurim-un yoson* という史料により、十二オトクは左・右兩翼とも六オトクづつから成ることを指摘、蒙古源流の記載とも併せて具體的にどのように編成されていたかを明らかにした。すなわち右翼六オトクとは *Kegid · Siberučin, Urad · Tangγud, Dalad · Qanglin, Merkid · Baganas, Besüd · Ügisin, Qaagin, Qalγučin*、であり、また左翼六オトクとは *Qaučid, Keriyes, Čaqad, Mingγad, Qončin, Quyayučin* のことであつた。そして次に、オルドスに所屬するとされながら「十二オトク」に數えられない集團についてその理由を検討した。すなわちノヤンダラの分封された「四ホリヤ」とはオルドスにあつたチンギス・ハン廟を指すものであること、また「ホリヤ」とはこの場合從來から言われてきたような遊牧形態を表わしたものではないことを指摘した。その他數オトクから成るウイグルチン、アマハイ等はそれらがオルドスに所屬する由來が特殊であつたために「十二オトク」に數えられなかつたと推定した。

總じて言うなら、十六世紀末の「オルドス・トゥメン」とはジノンの管理する「四ホリヤ」すなわちチンギス・ハン廟を中心に、まず左・右六オトクづつ、計十二オトクがその中核集團として存在し、それにウイグルチン、アマハイ等の大集團を加え、更に非ボルジギン氏系のサイト階層が支配する中小の集團をその中にいろいろな形で包含した集團であつた、ということが出來よう。

中期モンゴルにおける比較的大きな集團を、不明の點はまだ多いにせよ、一應その内部構成を明らかにし得たことは、史料が乏しいと言われるこの時代の社會制度を考察する上において、その持つ意味は決して小さくはない。例えば以上の考察からいくつかの問題が生じている。その一つは「ホリヤ」の意味するところであるが、すでに本文中で述べたように從來の見解は再検討をせまられている。またオルドス・右翼六オトクに見られた構成からして、從來のオトクに對する概

念にかなりの検討の餘地が残っていることを示している。

このオルドス・トゥメンに、チャハル、内外ハルハ等を加えて當時のモンゴルのトゥメンの集團構成がかなり明らかになった。いずれにせよこれらをふまえて、中期モンゴルの集團の問題も明確な解答が與えられるであろう。

註

- ① *Общественный строй Монголов*, стр. 124 邦譯『蒙古社會制度史』生活社、昭一六、二八二頁。
- ② 和田清『東亞史研究(蒙古篇)』東洋文庫、昭三四、五二一—七五二頁。
- ③ 森川「中期モンゴルのトゥメンについて」『史學雜誌』八一—一。
- ④ 和田前掲書、四九六頁。
- ⑤ Ligeti, L., (ed.) *Mongolian Studies*, Amsterdam, 1970, pp. 167—179.
- ⑥ *ibid.*, p. 176.
- ⑦ なぞアムニス氏はこの點について *Mélanges Hattori et Ap-ropos des noms de trois clans des Ordos* とする論文を書いたというが未見である。
- ⑧ この點は後章で明らかにする。
- ⑨ アムニス氏はこの點について打郎を「私に關しては十分な資料があるまでは民間語源説 *etymologie populaire* によつてその時 *dalan* (七十) に結びつけられていたところの、昔の *Tal-angut* という名の、方言による形態とみる方が好ましいと考へられる」と述べているが従えない。
- ⑩ 例えば皇明九邊考、卷六、三關鎮の邊夷考にチャハルの五營をあげているが、その中にトゥメンを二つに分ける左・右翼が、オトクと並んで「營」と記されている。この點については森川前掲論文、四四—五頁參照。
- ⑪ E. Haenisch (ed.) *Eine Urga-Handschrift des Mongolischen Geschichtswerks von Secen sagung (altus Sunang Secen)*, Berlin, 1955, 69-r, v, (以下ウルガ本と略稱)
- ⑫ ハインツ氏 Heissig, W., はオルドス・トゥメンの右翼部に含まれるこれらの集團を「あたかもオルドス・トゥメント、ウリヤンハン(之)の右翼三萬戸全體に所屬するものと考えた」(W. Heissig, *Die familien-und kirchengeschichtsbearbeitung der Mongolen I*, 16—18 jahrhundert, Wiesbaden, 1959, p. 109) といは誤りである。
- ⑬ ハインツ氏はオルドスの左翼を Qorcin, Keriyas, Quyin, Qayad, rucin (qucin), Mingrad の七つに分けるが (*ibid.*, p. 110) これはシタット本蒙古源流によつて誤まったのである。左翼が六つのオトクから成っていたのは間違いない。
- ⑭ ウルガ本 63-r, 64-r, 64-v, 84-v.
- ⑮ Rev. A. Mostaert and F. W. Cleaves (ed.) *Altan Tobci, A Brief History of the Mongols*, Scripta Mongolica I,

- Cambridge, 1952, II, p. 172. 以下 *Allan Tobči Nora* と略稱。
 ⑮ Keiked の名はウルガ本では記されないうが、Kegüd とあるところを内府鈔本では Keiked とある。(E. Haensh, *Qad-un ündün-u Erdeni-yin Tobčiya Wiesbaden*, 1966, p. 422. 従って Kegüd と keiked (つぎは子供(の複製形)とは同一集團であるはずである)。
 ⑯ *Allan Tobči Nora* II, 175.
 ⑰ 原文はつじや Qaračin とつじつが勿論 Qorčin の誤りである。C. R. Bawden, *The Mongol Chronicle Allan Tobči, Wiesbaden*, 1955, p. 193, § 118 参照。
 ⑱ ウルガ本 65-r.
 ⑲ ウルガ本 66-v.
 ⑳ 和田前掲書 五二四頁。
 ㉑ W. Heissig, *op. cit.*, facsimilia, p. 4.
 ㉒ *ibid.*, facsimilia, pp. 4~5.
 ㉓ B. Rinchen (ed.) *Les Matériaux pour l'étude du Chamanisme Mongol* I pp. 91—3.
 ㉔ リンチェン氏はこれを tuqul と轉寫しているがこれでは意味が明確でない。モステールト師 Mosaert, A. の *Dictionnaire Ordos*, 1941. Pekin (以下 D. O. と略稱) によれば tül なる語があり、それは「チンギスを祭るエジモン・ホローで毎年行なわれる盛大な祭りの時に、大杯に酒をそそぐ役人」のことであるという (p. 678-a)。恐らくこれであろう。またチャガン・トゥーフにも職掌は明確でないが turyai なるものが記されている (Heissig, *op. cit.*, facsimilia, p. 11)。
 ㉕ チャガン・トゥーフには manglayici と記されている (*ibid.*, facsimilia, p. 11)。但しその職掌は分らない。D. O. はまた manglai を「額」の意味の方に「タルハト旗に所属する clan もしくは sous-chan の名」をよめるとする (p. 454-b)。
 ㉖ 原文は tabay (分) であるが tabiy (供物) の誤記とみた。
 ㉗ *Chamanisme Mongol* I にはまた Čayan sürüg säcūqui yoson とつじつ資料が載せられている (pp. 87~91)。この資料の最初にまず「turyl が来て香をさそげよ」と招け。タイジたちを従えて来て、共にさそげよ」と聲をあげよ。香をさそげよから「三つの歌を歌え。」とありまたその最後の部分に「その後 kolösün (汗) を奮起させる時、フラジャとフラキを持って来て、yabayar を始め三つの歌を歌って奮起させるのである。」とある。恐らく「六つの大いなる歌」とはこの前後合計六つの歌のことであろう。但しその具體的なことは分らない。
 ㉘ リンチェン氏の轉寫は tuqula であるがこれでは何の意味か不明である。toyola~toyal-a (数える) の誤寫とみたが、これでも意味は明確でない。
 ㉙ リンチェン氏はつじを Čaqad mingyan と轉寫し一つの集團としている。しかし私はつじは二集團であつてあるの mingyan は左翼に所属する Mingrad の誤りと考える。
 ㉚ そのあとがきには「甲戌の年の夏の最初の月(四月)の十六日に Riñen jinong が Ejen gatur-i Altan debter を改め新たにした」と記されている。この Riñen jinong とは漢文史料で記されるオルドスの額旗臣であることは疑いない。蒙古源流によれば彼の生年は一六〇〇年でジノンになったのは一六二

七年であるという。(ウルガ本、91-r) また皇朝藩部要略の世系表、卷一によれば、彼は順治六年(一六四九)に札薩克多羅郡王に封ぜられ、同十三年に死んだとある。この頃の「甲戌の年」というのは一六三四年にあたる。

- ③② 但し左翼に所属するバジャラ・ウイジュンの分封地はハウチン、ケリイェスで、その後何の数字も記されていないが(ウルガ本 69-v) これは *Yeke qurim-un yoson* 等からみて二オトクであり、或いは *qoyar* (二) の語が脱落したのかもしれない。

- ③③ 筆者は先の「中期モンゴルのトゥメンについて」の論稿の註四五で、オールドスの諸集團について「或いはもともと一つの集團であったものが、後にいくつかに分裂したのを蒙古源流の著者がそのまま記したのかもしれない。」等の推測をしたが、以上の結果よりこの考えは若干の保留をしながらも撤回せねばならぬ。

- ③④ *Брахмичуров, укас. сов. стр. 128* 邦譯二九二頁。

- ③⑤ 『五體清文鑑譯解』京大文學部 昭四三 上巻、一九〇頁、No. 3313

- ③⑥ *Ts. Dandinsurung, Monggol Urgan Jokiial-un Deggeji jayun Biliig Orosibai, Corpus Scriptorum Mongolorum, tomus XIV, Ulaanbaatar, 1959, pp. 80-1*

- ③⑦ この點については岡田英弘氏の助言を得た。

- ③⑧ 箭内互『蒙古史研究』刀江書院、昭五、六八七頁。

- ③⑨ ウルガ本、41-r, 42-r なおアルタン・トブチにはこれら四妃の管理したオールドについて「ブルテゲルジン・ハトンの大オル

ドは Gürtüi ordo' フラン・ハトンのオルドは Solongras の Bars ordo' イスイ・ハトンのオルドは Sirgati-yin ordo' イスケン・ハトンのオルドは Qamudugui-yin ordo と云ふ」という記事が見られる (*Novu, II, p. 107*).

- ④⑩ 例えばウルガ本、33-r.

- ④⑪ Санжеев, Г. Д., (ред.): *Филология и История Монгольских Народов, Памяти Академика Бориса Яковлевича Владимирова, Москва, 1959, стр. 228-274*.

- ④② ウルガ本、69-v.

- ④③ 同、65-v.

- ④④ ダヤン・ハーンの死亡年を蒙古源流は一五四三年(嘉靖二二)としているが、これが誤りであることは和田氏によって早くから指摘されているところであり、氏はこれを嘉靖一一二年にされている(前掲書、四三七頁)。しかしながら最近の研究では、ダヤン・ハーンの死亡年はずっと早いものであるとされ、例えば萩原淳平(「ダヤン・カンの研究」『明代滿蒙史研究』、佐藤長(「ダヤン・カンにおける史實と傳承」『史林』四八—四)兩氏は正徳十四—五年(一一五—一二〇)頃、岡田英弘氏(「ダヤン・ハガンの年代」『東洋學報』四八—三・四)は嘉靖三年(一一五—四)頃とされている。ともかくも嘉靖九年(一一五三—四)にはその孫のボデイ・アラクが小主子、つまりハーンになっていたことは間違いない。

- ④⑤ 和田前掲書、四五一首。

- ④⑥ ウルガ本、69-r.

- ④⑦ 同、96-v.

- ④⑤ この間の詳しい事情については、和田前掲書、五〇四頁参照。
 ④⑥ 同書、七九〇頁。
 ⑤⑦ 同書、五〇四頁。
 ⑤⑧ ウルガ本 63-v。
 ⑤⑨ *Altan Tobči Nava*, II, pp. 166, 170, 171.
 ⑤⑩ 和田前掲書、四四九頁。
 ⑤⑪ 間野英二「十五世紀初頭のモグーリスターシーヴァイス汗の時代」『東洋史研究』第二十三卷第一號
 ⑤⑫ 例えばシラ・トゥージは *Esen tayisi* の子 *Araqa tayisi*、その子 *Onguča* とし、なら (H. II. Шастина; *Шара Туджи, монгольская летопись XVII века*, 1957, Москва, стр. 100) またガワン・シ・ラフの *Esen* の子 *Ös tomoi darqaq noyan*, その子 *Burin aruđlay* として、

- (*Biography of Saya pandita in Orat Characters*, CSM. TOMUS V—2—3, p. 77)。^{⑤⑬} いずれにせよイブラヒムの名は出て来ない。但しこれら蒙文史料にも限界のあることをつけ加えておく。
 ⑤⑭ ウルガ本、63-r。
 ⑤⑮ 同、65-r。
 ⑤⑯ 同、66-r。
 ⑤⑰ 同、71-v。
 ⑤⑱ 同、84-v。
 ⑤⑲ 同、84-v。
 ⑤⑳ 十六世紀以後のサイト階層の状況については森川「中期モンゴルのハーン一族とサイトとの關係について」『待兼山論叢』六一九七三を参照されたい。

to conclude that exiles were the pioneers in the development of the northeast.

A Study of *Otor* in the Ordos

by T. Morikawa

In the study of nomadic society, the classification of tribal organization has become an important topic. In this article the organization of the Ordos tribe is taken up as a case study of Mongol society from the 15th to the 17th century.

Existing studies show that the Ordos tribe included many component groups and was divided into Left and Right "wings". But the nature of Ordos society is still subject to much uncertainty, for example, how many *otor* were included in it?

By investigating Mongolian documents hitherto rarely consulted, the author has found the answer to this problem given clearly in material relating to the cult of Cinggis-qan's mausoleum.

On the basis of these documents, it has been ascertained that Ordos society in the early 17th century was organized into 12 *otor*; half of them constituted the Right wing and the other half the Left wing.

More precisely, the Right included *Kegüd*, *Sibarucın*; *Urad*, *Tangrud*; *Dalad*, *Qanglin*; *Merked*, *Baganas*; *Besüd*, *Ugüsin*; *Qatagin* and *Qalırucın*; and the Left included *Qaučın*, *Keriyes*, *Čaqad*, *Mingrad*, *Qoničın*, and *Quyaıucın*.

The author concludes that the Ordos *tümen*, centering around the mausoleum of Cinggis-qan which was managed by the *Jimong*, had twelve *otor* as its core group, six in the Right and six in the Left

wing. Large groups such as *uyijurcin* and *amagai* were attached to it, and it contained small and medium-sized groups controlled in various ways by non-*Borjigin-Sayid* lineages.